



**組織力に魅せられ**  
 診療所では、一人一人の患者

へき地臨床現場から、県行政へ「転身」して丸三年が過ぎました。桜がきれいな県庁舎で、本年度もがんばるぞ」と、ひそかに気合を入れました。

私は一九九二年、自治医大を卒業した後、山口県で十二年間、へき地医療に携わりました。

その後、なぜ行政に入ったかというところ、へき地医療現場のままさまざまな課題に対して、県行政の内側から取り組みたいと思ったことが大きかったです。また、違う世界を見てみたいという興味も正直ありました。

いしまる やすたか  
**石丸 泰隆** 15期生1992年卒



山口県庁周辺は、県庁所在地でありながら、自然の景観はすばらしい。4月には、桜が満開となった

**県健康福祉部健康増進課**

【私の勤務地】県庁所在地である山口市は、2005年10月に1市4町が合併し、人口約19万人の新しい「山口市」が誕生した。県の中央部に位置し、自然や歴史的文化的資源に恵まれた、美しい街である。県庁敷地内にも、山口藩の藩庁門や旧県庁舎、県会議事堂などが残されている。

「へき地」縁の下で支えたい

さんと直接向き合い、医師として「正義」と思ふことを即断即決していました。

行政では、多くの点で動きが異なります。多くの人が、さまざま

さまざまな情報を集め、協議し、費用対効果なども考慮し、一つ一つ大きなものを形作っていく感じ。臨床現場ほどには、動きは速くないですが、時に、すごい巨大な力で物事を動かします。まだ、私は行政の中で十分な活躍ができるほどの技量は身につけていませんが、この大きな行政組織の力に魅せられています。

医療の現場と、行政の場は、時に大きな距離を感じることがあります。一番の問題は、それぞれの中身が、お互いに見えづらいことだと思えます。後輩医師からも、時に、行政に対する不満の声を耳にすることがあります。

実は、行政との距離を縮める一番の秘訣(ひけつ)は、行政をよく知ること、知ってもらうこと。そして現実的な「限界」がそれぞれの領域にある中で、「共に」課題を解決し社会貢献

のために知恵を「出し合う」姿勢だと思えます。

さて、話は変わりますが、昔お世話になった若い患者さんが亡くなられた新聞の記事が先日、偶然目に留まりました。涙が出ました。診療時代のいろいろな患者さんの顔が頭をよぎりました。いろいろな思いが絡まり、心が震えました。

**データに潜む思い**

でも、臨床を離れた後悔の涙ではありません。行政の中で、データや机上の情報に追われている自分に「はっ」としたのです。例えば、がん登録統計にも、一つ一つの数字に、悲しみ、勇気、生きたいという思いなどが刻まれているのだった。そう、襟を正しました。

いつまでも「行政に入ったばかりで」という言葉は通じません。へき地の住民、医師、みんなの笑顔と健康を願い、縁の下で支える力を蓄えたいと思います。

(次回予定は佐賀県)